

明治九年三月十二日より明治十一年五月十二日迄の二ヶ年とする。

二、給料二五〇円及び住宅費二〇円は月末に支給されるものとする。

三、授業時間数、時間割は校長の定めるものとし、一日の授業は六時間以内とする。

四、授業に変更のある場合には、コストイリヨフ氏は校長の承諾を得るものとする。

五、コストイリヨフ氏が学校の定める休日以外に、病気でもなく無断欠勤した場合には、月給より日割り計算で差し引くものとす。またコストイリヨフ氏が、授業の職務を果たせなくなったり、素行不良あるいは契約不履行があった場合、校長はこの契約を破棄することを得、その日をもって月給の支給は打ち切られるものとす。

六、コストイリヨフ氏の都合により、本契約を破棄することは認められるが、その日をもって月給は打ち切られるものとす。但し契約解消の希望ある場合、氏は一ヶ月前に校長にその旨通告するものとす。

七、東京外国語学校が何らかの事情で、この契約期間中にコストイリヨフ氏を解雇する場合、契約解消時より三ヶ月分の給料を受けるものとし、この旨を一ヶ月前に通告せねばならない。但し契約解消時に残り契約期間が三ヶ月未満の場合、三ヶ月分ではなく、残り期間分の給料が支給されるものとす。

八、コストイリヨフ氏死去の場合、本契約は破棄され、氏の逝去までの給料は最寄りの領事館に委託するものとす。

そればかりか、別の外国人教師は、死亡した場合の遺骸の処置にまで言及していたと書いている。

三 魯語科とナロードニキ精神

魯語科の救世主メーチニコフ

スタッフの問題は外国人ばかりではなかった。一八七四（明治七）年二月には、主任教諭の市川が外務省に転じ、特命全権公使榎本武揚に随行してペテルブルグに赴任、かの樺太千島交換条約の通訳を務めることになるから、魯語

科は火の車の状態だったはずである。しかし救世主は思いもかけぬ方向からやって来た。時の文部卿木戸孝允の斡旋で、米国の市民権を持った亡命ロシア人（彼は日本に来る直前に米国に渡り、ニューヨーク州の市民権を二ドルで買っている）が一八七四年の秋に着任するのである。彼の名はレフ・メーチニコフ（二八三八―八八）、これまですでに何度か引用してきた人物である。

一八五九年以来亡命生活を送ってきたメーチニコフは、イタリアの解放運動リソルジメントでガリバルヂ軍の副官をつとめただけでなく、スイスを拠点にロシア、スペイン、フランス、モンテネグロの革命運動に参加した過去を持ち、第一インターナショナルのバクーニン派に名を連ねる現役の革命家であった。専門は地理学、民族学でしかも東洋をフィールドにしていた。コンミュン敗北後のパリで、日本の革命（明治維新をメーチニコフはもつともラディカルな革命と呼ぶ）の報に接し、日本語の修得を決意した彼は、パリ大学日本語科教授レオン・ド・ロニーの紹介でジュネーブ滞在中の大山巖（後の陸軍元帥）と邂逅し、日仏語の交換授業を行い、すでに一三か国語を修得していた彼は、ほぼ半年で日本語をマスターしてしまう。

そしてちょうどその時、世界歴訪の旅を終えた岩倉使節団の一行がジュネーブにやってくるのである。また大久保利通のあとを追ひ、使節団より一足先に帰国の途についた木戸孝允とは、ジュネーブで二度会見していることが木戸の日記から分かる。高崎正風、田中光顕、田中不二麿等、使節団の随員とも親しく交わったメーチニコフは、なんと西郷隆盛の招聘を受けて、薩摩藩子弟のための学校を開設するために、来日したのだった。彼が来日した一八七四年は、祖国ロシアでナロードニキ運動を迎える年である。メーチニコフにしてみれば、後進性のシンボルとされる東洋へ行くことは、形を変えた〈ヴ・ナロード〉（民衆の中へ）であったといえよう。なぜなら〈ヴ・ナロード〉運動は、ロシア農村の後進性の実情を探り、民衆と接近することを目的としていたのだから。



サムライ姿のメーチニコフ

メーチニコフによって活気づく魯語科

彼こそは東京外国語学校魯語科のみならず、日本のその後のロシア学の方角を決定付けた人物といっても過言ではない。前出の安藤はこう語る。「其年の秋にメーチニコフ^{メーチニコフ}という露西亜人が新任して教鞭を執る事となつた。此の人の兄さんは露西亜南部の控訴院長を勤め、弟さんは後年オデッサの大学長となられた。氏は中年俊才を以て伊国統一の大事業を完成した大政治家ガリバルヂの参謀として各所に転戦し、身に七創を蒙つた程の勇士で、元氣旺盛な人であつた為め、生徒も其感化を受けて大に勉強した結果、露語科生徒は非常に活気を帯びて来た」(同右)

メーチニコフの死後、その遺稿を編集し、『文明と歴史的大河』(一八八九年)として出版した畏友エリゼ・ルクリュ(フランスの高名なアナキスト、地理学者)は、序文で外語時代のメーチニコフは「生徒のあいだで絶大な信頼と人気を博した」と書いているが、安藤のこの証言はそれを裏書きするものである。

維新後の日本に殺到する文明人という名の野蛮人の道徳的退廃に憤りを覚えたメーチニコフ（新学期が始まるまで彼は、築地の外国人租界に居住し、そうした西洋人の醜態を目のあたりにしていた）は、わずか一年半の日本滞在ではあったが、魯語科の生徒の知的欲求にこたえるべく、教育に専念し、同時に維新革命を成功させた日本の文明論的意義を精力的に探っていくのである。

亡命系教師の系譜

これまでのメーチニコフ研究では、彼が革命家としての自分の過去を伏せていたとされてきた。現に大山巖宛ての手紙で彼が実名を出さず、「跛の魯人より」とだけ記していたため、「大山巖伝」の編者は、この人物の特定に苦慮したのだった。しかし安藤の証言を見るかぎり、彼は自分の経歴を生徒に明かしていたことになる。「首都に外国語学校が設立されたと聞くや、全国各地から生徒たちがまさに群をなして集まってきた。なかには、十一、二歳の子供もいたが、大部分は青年であり、時には妻子持ちで、すでに先般の内乱でなんらかの英雄的武勲をたてた大人のサムライまでもまじっていた」（『回想の明治維新』岩波文庫、一九八七年、二七二ページ）とメーチニコフは書いている。そうであればこそ、改革の意気に燃える生徒たちはこの新しい先生を慕ったにちがいない。刀をさしたサムライ姿の彼の精悍な写真が残っているが、足の不自由な彼は馬に跨って外語に通っていたようだ。

ちなみに安藤が言及しているメーチニコフの兄はトルストイの小説『イワン・イリイチの死』のモデルであり、弟は梅毒、回帰熱の研究でノーベル医学・生理学賞を受けた細菌学者で、日本におけるヨーグルトの普及者であることはもはやほとんど忘れられている。そしてこのメーチニコフの在職中に、中江篤介（兆民）が校長として着任するのである。校長在職期間がわずか三か月とはいえ、仏語科の教師中川元などもまじえ、フランス語でかなり突っ込ん

だ話をしたはずである。「仏蘭西人でも此のメーチニコフほど仏語の演説のうまいものは得難い」と兆民は評していたと、横山健堂は伝えている。

極度の貧血症のため、メーチニコフは一八七五（明治八）年末に離日を余儀なくされるが、これ以後文部省は領事館系の教師よりも亡命系の教師を重用するようになる。長い亡命生活を送ってきたメーチニコフは、プレハーノフ、トカチヨーフ、ステュブニヤーク・クラフチンスキー、クロポトキンといった錚々たるナロードニキ革命家と親交があったから、おそらく彼の斡旋で政治亡命者が相次いで外語に雇い入れられることになったのであろう。資料に残限りの名を列挙すれば、前出のコストイリヨフを除いて全員亡命系である。ボゴモローフ（一八七六―七七七年）、ダニーロヴィチ（一八七七―七九年）、コレンコ（一八七八―八四年）、グレイ（一八八四―八五年）となる。

コレンコの文学講義

これまで中村光夫をはじめとする二葉亭四迷研究者は、グレイの朗読形式の文学の授業の影響力を指摘してきたが、在職年数から言ってもコレンコの存在を無視できない。そこでロシアではメーチニコフ以上に無名であるが、わが国のロシア語教育史で大きな役割を果たしたこの人物について少し述べておこう。

一九二〇年代にソ連で編纂された『革命家辞典』にこのアンドレイ・コレンコ（一八四九年生）に関する記述がある。それによるとペテルブルグ農業大学の学生時代に、政治活動のかどで逮捕され、ペトロ・パウロ要塞監獄に拘留（一八七〇年）後、チェルニゴフ県に流刑、官憲の監視下に置かれたとある。一八七一年にアメリカに逃亡、そこから外語に赴任したのであろう。

北海道立文書館には一八七四（明治七）年に外語に入学、八一年に卒業した小島倉太郎文書が保管されており、そ



アンドレイ・コレンコ。1884年6月20日、コレンコが嵯峨の屋に贈った写真（矢崎家所蔵）

こには一八七九（明治十二）年のコレンコのロシア文学史、ロシア詩の講義を克明に筆記したノートが含まれており、当時の外語の授業の実態を伝える貴重な資料となっている。

ここではエカテリーナ時代からプーシキン、ゴーゴリにいたるロシア文学の流れがかなり詳細に語られ、ロシア自然主義文学における言文一致の伝統や、ゴーゴリの社会派小説とりわけ「涙を通した笑い」の意味が詳細に分析されており、その内容は今日のロシア文学史の記述

と比べても遜色のないものである。

またコレンコが暗唱用に編んだロシア詩集には、デカブリストのレイレーエフやオドエフスキー、さらにゲルツェンと並んでナロードニキ思想の先駆者となったオガリョーフの詩が数多く収録されている。ここで重要なのは、露語科（一八七七〔明治十〕年より表記が変わる）の生徒たちが、脱亜入欧をめざし文明開化の道をひた走る世情のなかで、西欧文明との対決のなかで生まれたナロードニキ思想の実践者の口から、ロシア文学に再現された社会批判や、いわゆる余計者の意義を熱く聞かされたことであり、そうした精神の凝縮した詩を原語で朗唱しながら、神保町あたりを闊歩していたことであろう。このなかで後の二葉亭による言文一致の素地がごく自然に培われていくのである。ちなみにコレンコの講義は、作家として二葉亭のライバルとなる嵯峨の屋お室（本名矢崎鎮四郎、明治十六年卒業）の「露国文学一斑」（『志がらみ草紙』）の下敷きとなっている。（なおコレンコの文学講義については渡辺雅司



迷四亭葉二の時代の外語

「日本における最初のロシア文学講義」、『同志社外国文学研究』、第三九号参照)

グレイとは何者か？

このコレンコのあとを継いで教壇に立った米国籍のニコライ・グレイは、教科書不足を朗読形式のユニークな授業で補った。「学校時代に教場で教師がガンチャロフを読んで呉れたことがある。本は只一冊しかなかったので、我々生徒は本なしで読むのを聞いて居る。その教師は実に読むに上手であつたが面白くてたまらぬ。」(二葉亭四迷『子の愛読書』) 異色の教師グレイの感化力については、太田黒重五郎はじめ多くの生徒の証言が残っているが、その経歴は今のところはつきりしない。

ロシアの日本研究者イワノワは、グレイはナロードニキ運動の母体となつたチャイコフスキー団の創始者ニコライ・チャイコフスキー(一八五〇—一九二六)との仮説をかつて提起したが、立証することはできず、つづいて『土地と自由』結社員のエリクス・ヴォルホフスキー(一八四六—一九一四)では、この説を再提起している。

この人物は一八七四年に逮捕され、その後シベリア流刑になるが、米国人ジョージ・ケナン(一八四五—一九二四)、『シベリアと流刑制度』(「一八九一」)の著者。なおソ連大使を務めた同名の著名な外交家は甥にあたる)の助力で日本へ脱出、その後アメリカを経てロンドンへたどり着いているから、一年間外語で教鞭をとつた可能性がない

とは言えない。特定はできないにせよ、このグレイという人物が強烈な個性の持ち主であったことは、疑いないだろう。旧外語露語科のこうした知的雰囲気を筆者はナロードニキ精神（当時の言い方では虚無気質）と呼びたいのである。そうであればこそ、生徒のなかから、村松愛蔵のような民権家や嵯峨の屋、高須治助（プーシキンの「大尉の娘」の訳者）さらには異才のジャーナリスト、小説家として時代を先取りするグルメ本や予言の書を数多く発表した村井寛（弦斎）のような文学者が出てきたのであろう。

四 日本人教師陣とカリキュラム

日本人スタッフの顔ぶれ

外国人教師の記述が長くなりすぎたので、ここで日本人教師の顔ぶれを紹介しておこう。市川が抜けた後、柳田二郎と大前退蔵の名前が一八七四（明治七）年の「官員並生徒一覽」に記されている。柳田がどのような人物か定かでないが、遣魯留學生の田中次郎ではないかと推定される。また大前は二代目ウラジオストック貿易事務官、臨時代理公使をつとめる人物である。しかし教師として長く教鞭をとった形跡はなく、一八七六年七月には、かつての加賀藩遣魯留學生の嵯峨寿安が、わずか一年間教鞭をとっている。この嵯峨は謎の多い人物だが、自分の意志でシベリアを横断した（それも単身、徒歩で）最初の日本人であり、帰国後文部卿木戸の斡旋で開拓使御用掛、函館魯学校教師を経て外語に着任、一八七七年一月の校長内村良蔵による教育課程の変更を不服として退職している。

そしてこの頃文部省から露和辞典編纂の辞令が出されるのだが、これは次の主任教諭古川常一郎（在職期間一八七九—一八八五年）、市川文吉（一八七九—一八八五年、外務省出仕）等の手で一八八七（明治二十）年に「露和字彙」として